

---

[成果情報名] スモモ「貴陽」のジベレリン処理による収量安定確保

[要約] スモモ「貴陽」は開花期に人工受粉を行い、さらに、満開 20～25 日後および 55 日後の果実へジベレリン散布処理することにより、生理落果が抑制され収量を確保できる。

[キーワード] スモモ、貴陽、ジベレリン、収量

[担当部署] 果樹部・果樹栽培チーム

[連絡先] 092-922-4946

[対象作物] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

---

[背景・ねらい]

山梨県の民間育種により育成されたスモモ「貴陽」は、大果で高糖度で食味の優れる品種であり、県内でも試作が開始されている。しかし、3 倍体品種で自家結実性がなく、人工受粉を行っても生理落果が多発し結実不安定なことが問題となっている。そこで、結実向上のためのジベレリン処理の効果について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. スモモ「貴陽」は、満開20～25日後および55日後の果実にジベレリン200ppm水溶液を散布処理することで、生理落果が抑制され結実率が高くなり、収量を確保できる（図1、表1）。
2. ジベレリン処理は、果皮色、果肉硬度、果実の糖度および酸には影響しないが、果実重はやや小さくなる（表1）。
3. 花粉遮断しジベレリン処理だけで結実した果実は、ジベレリン処理と人工受粉を併用した果実に比べ果実重および種子長が極めて小さい（表2）。
4. ジベレリン処理により新梢長は長くなるが、翌年の花芽形成への影響はほとんどない（データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. スモモ「貴陽」の結実安定対策技術として活用できる。
2. ジベレリン処理により結実率が高まるため、着果過多にならないよう摘果を徹底し適正着果に努める。
3. ジベレリン処理に当たっては、翌年の花芽形成を阻害しないよう、薬剤ができるだけ枝葉にかからないようにし、散布後は枝や誘引棚を叩き余分な薬液を落とす。

[具体的データ]

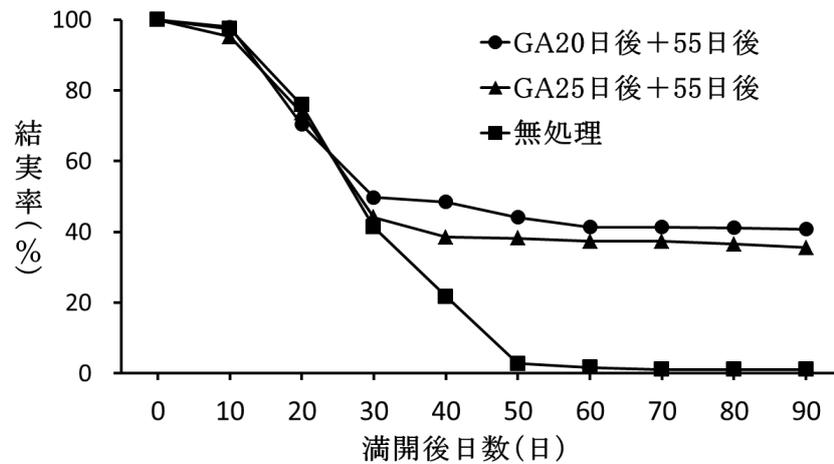


図1 スモモ「貴陽」のジベレリン処理が結実率に及ぼす影響 (平成25年)

- 注) 1. 樹齢15年生、雨よけトンネル栽培、満開日3月17日。  
 2. 全区とも開花期(3月15~23日)に「ハリウッド」花粉(2倍希釈)を毛バタキで5回人工受粉。ジベレリン処理は1,2回目とも200ppm水溶液を果実へ散布。  
 3. その他の栽培管理は福岡県果樹栽培指針に準ずる。

表1 スモモ「貴陽」のジベレリン処理が果実品質に及ぼす影響 (平成25年)

処理区	果皮色	果実重 (g)	果肉硬度 (kg)	糖度 (Brix)	酸 (pH)	収量 (g/m <sup>2</sup> )
GA20日後+55日後	4.4	117.0	0.69	15.5	3.8	1434
GA25日後+55日後	3.7	123.4	0.69	14.8	4.0	1317
無処理	4.8	156.3	0.69	16.6	4.0	53

- 注) 1. 全区とも開花期に人工受粉。ジベレリン処理は1,2回目とも200ppm水溶液を果実へ散布。7月12日(満開117日後)収穫。  
 2. 各区20~40果供試。果皮色は、0(着色無し)~5(完全着色)の5段階評価。  
 3. 果肉硬度は、ユニバーサル硬度計(円錐形プランジャー)で測定。

表2 スモモ「貴陽」の人工受粉がジベレリン処理果の品質に及ぼす影響 (平成24年)

人工受粉	果皮色	果実重 (g)	果肉硬度 (kg)	糖度 (Brix)	酸 (pH)	種子長 (mm)
有り	4.2	127	0.64	15.9	4.0	12.0
無し	3.9	59	0.65	18.4	3.8	4.2

- 注) 1. 7月11日(満開100日後)収穫。人工受粉無しは花粉遮断。  
 2. 満開期(4月12日)、満開29日後(5月1日)にジベレリン100ppm水溶液を果実へ散布。

[その他]

研究課題名: カキ、ナシ等品種・系統適応性

予算区分: 経常

研究期間: 平成25年度(平成24~25年)

研究担当者: 豊福ユカリ、朝隈英昭、牛島孝策、渡邊辰彦、藤島宏之

発表論文等: 園芸学研究9別2